BLOSSOM

ANDREW VACHSS

ブロッサム

アンドリュー・ヴァクス

佐々田雅子訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

Hayakawa Novels

BLOSSOM

by Andrew Vachss
Copyright © 1990
by Andrew Vachss
First published 1992 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by Alfred A. Knopf, Inc.
through The English Agency (Japan) Ltd.

検印
廃止

ブロッサム

1992年5月20日　初版印刷
1992年5月31日　初版発行

著者　A・ヴァクス
訳者　佐々田雅子
発行者　早川　浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(3252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　株式会社亨有堂印刷所
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-207747-6 C0097
Printed and bound in Japan

ブロッサム

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1992 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アンドリュー・ミッチェルへ

一九八五年十月十九日生まれ
一九八九年九月六日遺体発掘

この地上では一日たりとて幸せでなかった小さき者よ
今は安らかに眠れ

1

夕日は当然のようにハドソン川の向こう岸に落ちた。

おれは三十丁目でウェストサイド・ハイウェイを降り、東の方角、十番街に向かって車をころがした。途中、ダッシュボードにテープでとめた写真にちらっと目をやった。マリリン。それが彼女の名前だ。十四歳だと父親はいっていた。ぽっちゃりした丸顔の女の子。それが、ピンクで飾りたてたベッドルームで、ボン・ジョヴィのポスターの隣に立って、カメラに向かって微笑んでいる。

マリリンは家を飛び出した。地獄へ向かってまっしぐらというわけだ。ポートオーソリティーに落としてくれるバスに飛び乗る前のマリリンのことはわからないが、その後どうなったかは見当がつく。

通りに落ちた生肉。歩道に踏み出したとたん、ポン引きの餌食になったのだ。

マリリンはどこかこのあたりにいるに違いない。カネを追いかけて。

おれも同じだ。

マリリンがリンカーン・トンネルを通って家路につく勤め人を相手にしてるとは思えなかった。料理人にさばかれる野菜みたいに、トンネル付近にたむろするプロの女たちに軽く追っ払われてるはずだ。年端のいかない女の子は、室内で仕事をしてるのがふつうだが、マリリンはどこにも見当たらなかった。となると、残された場所は一つしかない。

おれは手を振って「降りろ」と合図した。だが、音なしマックスは先手を打って、いつの間にか身を沈め、後ろの座席にひろがった影の中にもぐり込んでいた。

同じブロックを二度以上通るのはまずい。商売してる女たちは、探りを入れにきたやつらをすぐにそれと見抜く。十二丁目の信号にひっかかって停まった。プロフは持ち場についていた。小さな体を車椅子に乗せ、手には物乞い用のスタイロフォーム（発泡スチロールの一種）のカップを持って、中のコインをチリンチリン鳴らしている。おれと視線が合った。プロフはうなずくと、腰のあたりに置いた手で、その先のブロックを指さした。

これなら見逃しようがない。赤ん坊のようにぽっちゃりした肉。それが赤いホットパンツの裾からあふれだし、白

いホールタートップをぐいぐい引っ張っている。分厚いメーキャップで覆い隠した顔。背を高く見せようとして、頭のてっぺんに結い上げた髪。沈む夕日が舗道に残した熱波の中で、ぐらぐら揺れているスパイクヒールの足もと。彼女はほかの女たち何人かと一緒に、長くて低いビルの壁にもたれていた。突き棒で追いたてられるのを待っている家畜のように。

おれは角の建物のI形鋼の梁のほうをちらっと見た。その影で何かが動いていた。ポン引き野郎か？　いや、手も早けりゃ足も早い街の悪党どもだ。やつらは車のフロントガラスを拭きに寄ってきたり、クラックの瓶を売りつけにくる。あるいは、いきなり顔に切りつけてくる。その間に、もう一人が財布をかっぱらうという寸法だ。財布でなくたって、金目のものなら何でもいいのだ。

おれはプリマスのスピードを落として這うように進んだ。右手に空いた駐車場があった。黒人の女が列を離れ、ブロックを斜めに横切ってこちらにやってきた。高い頬骨に街灯の光が反射し、死んだような目にクラック欲しさの色が宿っている。

「ねえ、あたしを乗っけてみない？　つきが変わるかもしれないよ」

「今夜はやめとこう」おれはそう答えて、女の肩越しに向こうを見やった。

「あの子は未成年だよ。やったらムショ行きだからね」

おれは煙草に火をつけ、首を振った。黒人の女は車から離れた。身についた癖で、尻を振りながら立ち去っていく。癖になってるのはそれだけじゃない。エイズとクラック――どちらが先に女をくたばらせるか、競い合っていた。

マリリンがやってきた。おずおずと。「パーティーやんない？」そういって、おれの顔をのぞき込んだ。おれが断るのを期待している。できれば誘いにのってほしくないのだ。途方に暮れた様子だった。

「いくらだ？」と訊いてみた。それで、むこうも逃げ出すわけにはいかなくなった。

「あたしの分が五十、部屋代が十ドル」

「五十で何がもらえるんだ？」

目はどこかよそを見ていた。「あたしが。三十分。どう？」

「よし」

マリリンは車の前をぐるりとまわった。うなだれていた。あきらめたのだろう。

女の子がよくやるように、膝から先に乗り込んできて、ドアを閉めた。「角を左に曲がって」マリリンはそういうと、ハンドバッグに手を突っ込んで煙草を探った。どこに

いこうとしてるのか、おれにはわかっていた――西二十五丁目の暗くて人気のない駐車場の一つだ。おれが部屋代の十ドルをけちろうとするかもしれないと思ったのだろう。青信号で直進し、九番街に車を向けると、マリリンは顔を上げた。「ちょっと……あたしがいったのは……」

「もうそれはいいんだ、マリリン」手荒な真似をするつもりはないということをわからせるために名前を呼んだ。女をいたぶって楽しむ男がいるということは、ポン引きから聞かされているはずだ。だが、それも仕事だといわれているはずだ。それがわからなければ、わかるまで叩き込まれているに違いない。そう思えるようになるまで繰り返し叩き込まれているに違いない。

「あんた、誰？」その声には、怯えた赤ん坊の泣き声のような響きが混じっていた。

「そんなことはどうでもいい。おやじさんからきみが家出したって聞いた。それで……」

「家に連れ戻すっていうの？」

「そうだ」

マリリンはドアのハンドルをつかんで揺さぶった。びくともしない。どうしようもなかった。おれの顔を見て、無駄なあがきと悟ったようだ。とたんに、わっと泣き出した。

リリイの施設の裏に車をつけると、マリリンはようやく顔を上げた。マックスが後ろの座席からするりと滑り降りた。おれは煙草に火をつけて待った。

「あたしのうちじゃないじゃない」

返事をしなかった。

リリイがマックスと一緒にやってきた。長い黒髪が夜風になびいている。リリイは助手席のドアを開けて声をかけた。「ハイ、マリリン」そして、手を差し出した。マリリンはその手をとった。いつもの成り行きだ。リリイはしばらくマリリンを預かり、話しかけ、何があったのか、なぜそうなったのかを探り出すだろう。その上で、とくに問題がなければ、少女は家に電話し、父親が引き取りにくるという段取りになる。何か問題があったときの対処のしかたはリリイが心得ている。

おれはこんなことをずいぶん長くやってきた。タイムズ・スクエアあたりの掃き溜めを流してまわって、家出少女や少年を釣り上げる仕事だ。動いてる最中に、ポン引きがまわりをうろつくこともある――マックスがついてきたのはそのためだ。

以前は、子どもたちをまっすぐ家に連れ戻していた。だが、今はおれも少し賢くなっている。

新しいゲームになっても、ルールは変わらない――今度も、父親は前金で払ってくれた。

2

マックスはリリイのところに残した。マックスの女、イマキュラータもそこで働いている。二人連れ立って家に帰るのだろう。プロフの家は路上だ。おれは一人で家に帰った。

オフィスに入ると、暗闇の中からパンジイのでかい頭がぬうっと現れた。氷水みたいな目がおれを見て喜びの色を浮かべた——だが、おれ一人とわかると、がっかりしたようだった。パンジイはナポリタン・マスチフの雌で、百四十ポンドの体重がある。オフィスの暗がりにいると、筋肉質の油膜みたいに見える。おれはコートのポケットからナプキンに包んだホットドッグを二本取り出した。パンジイは体を丸めて座ると、顎の両端から涎をだらだら垂らしながら待った。そのまま数秒間おいた。その後、「話せ！」といってまるごと放り投げた。ホットドッグはあっという間に消えた。パンジイは例によって「もうないの？」という表情を見せたが、結局、オフィスの隅の気に入りの場所へぶらぶら戻っていった。そこはアストロターフ（人工芝）の敷物が擦り切れて、セメントの床がむきだしになっていた。

「外に出るか？」と、おれは訊いてみた。パンジイはどうでもよさそうだったが、いつもの習慣で、裏のドアのほうへ歩いていった。おれはパンジイが非常階段を上って屋上にいくのを見送った。パンジイの庭はコンクリート敷きだ。

昔、おれがいたところの庭もそうだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3

翌朝、通りに出て、ママ・ウォンのレストランの奥にある公衆電話にかけてみた。その番号がおれの番号だ――おれにかけるとしたらその番号しかない。ママがいつものように答えた。

「〈ガーデンズ〉です」

「おれだよ」

「こられるかい？」

「今からいく」

「わかった。表からだよ。いいね？」

それで切った。ハイウェイを降りると、チャイナタウンに向かって東進した。フェデラル・プラザの裏の小さな三角形の公園を通り過ぎた。中国人の老人が、中年女二人を相手に、みごとな太極拳を教えているのが見えた。ベンチに寝そべっているアル中どもは、目に入らないようだ。

ママの店の正面の窓には白い竜のタペストリイだけが掛かっていた。中に誰がいるにしても、おまわりではないし、面倒にはならないということだ。

プリマスを店の裏の路地に停めた。漢字をきれいに書き連ねた壁の下に。ドアをノックする手間は省いた――漢字は読めないが、書いてあることの意味を知っていたからだ。音なしマックスがここは自分の縄張りだといっているのだ。

ママの店の裏ののっぺらぼうな鉄のドアがわずかに開いた。こちらからは中が見えないが、むこうからはこちらが見える。ドアは閉まった。おれは路地を抜け、表の通りに出て、角を曲がった。正面のドアを開けると、ベルがちりんちりんと鳴った。同時に、キッチンの赤いライトが点灯したはずだ。

ママは自分の祭壇に向かっていた。つまり、レジスターにだ。おれに気づくと、軽く頭を下げた。挨拶を返すと、何やら目配せする。おれは奥のほうをちらっとうかがった。おれの指定席のブースに女が座っていた。顔はこちらからは見えない。濃い栗色の髪が、青いビニールのクッションの後ろにまで垂れている。

「おれに用だって？」ママに訊いてみた。

「昨日きたんだよ。バークに用だって。名前はレベッカっていってたよ」

おれは肩をすくめた。ぴんとくるものがなかったからだ。

警戒信号も灯らなかった。
「あんたを待つっていうんで、バークはしばらくこないよっていったんだけどね。じゃ、またくるって。だから、待つようにいったんだ。いいね？」
「すると、それからずっとここにいるのかい？」
「地下室にね」
「何か持ってきたのかい？」
「メッセージだけだよ」
「それだけ？」
ママはお辞儀をした。「話してみるかい？」
「ああ」
おれは奥のほうへ歩いていった。その見知らぬ女の向かいに腰を下ろした。
ほっそりした女だった。ふさふさした栗色の髪に縁どられた小さな顔。その顔の中でひときわ目立つ大きな黒い目。鋭く直線的な頬骨。化粧はしていない。薄く、乾いた唇。マニキュアが半分剝がれた爪。荒れた手。掃除や食器洗いやおむつの交換をやってきた手だ。ママの使ってるウェイターがやってきて、氷水の入った水差しとグラスを二つテーブルに置き、あふれかえった灰皿を取り替えた。そして、おれの目を見た。おれは軽く首を振った。女は客かどうかまだわからなかった。
「おれに話があるって？」女に訊いてみた。
「バークと話したいんだけど」
「バークはおれだ」
「そういわれても、どうして本人ってわかる？」
「そんなことはおれの知ったことじゃない」
「わたし、ヴァージルの女房」女はそういって、おれの顔を見つめた。
「ヴァージルって誰だ？」
「あんたがバークなら知ってるはずよ」
「あんた、こんなことしてて楽しいのかい？　ほかにすることはないのか？」
女の声は硬い石炭のようだった。深い鉱脈から掘り出した石炭だ。「どうしても確かめなきゃ。わたし、自分の考えでここにきたんだから。あのね、ヴァージルは今、トラブルを抱えてるの。で、兄弟を捜してきてくれっていうのよ。どこにいけばいいかも教えてくれた。でも、電話するわけにはいかなかった。あの人が電話じゃ無理だろうっていうから。あんたのことも一筋縄じゃいかない人間だっていってたわ。だから、あんたのほうから訊きたいことを訊いて……まず、それから済ませましょ」
「ヴァージルっていうのは誰なんだ？」
「あんたがほんとにバークなら、昔のムショ仲間よ」

「じゃ、抱えてるトラブルっていうのは？」
「それより先に証明して」女はそういって、またおれを見つめた。
「ヴァージルは殺人で食らい込んだ。故殺だ。やつは刺したんだ……」
「ヴァージルのことは知ってるわ。バークのことを知りたいのよ」
「秘密コードでも知りたいっていうのか？」
「ふざけないで。どうしても確かめなきゃならないんだから。ここの中国人たち、わたしをここに引き止めて、ハンドバッグの中まで調べた。でも、文句はないわ。もし、あんたがバークじゃないなら、どうすれば彼に会えるのか教えて。会うためなら何だってするから」
「おれがバークだ。ヴァージルはおれの人相をいわなかったか？」
女は歯を見せずに笑った。「あんまりハンサムじゃない男なんてごろごろいるから。そんな説明じゃ、たいして絞れないわ」
「ヴァージルだってケイリイ・グラントにはほど遠いぞ」
「うちの亭主はハンサムよ」女はそういった。今日は何曜日かを阿呆に教えるみたいな口調だった。
「おれの知ってるヴァージルはもの静かな男だ。田舎者で、口数も少ない。生まれ故郷で仕事がなくなって、シカゴに出た。女も後を追ってきた。ところが、女の郷里から、変態野郎が女の尻を追ってきた。結局、そいつは自業自得で切り刻まれる羽目になっちまった。おれはヴァージルが仮釈放委員会にかかる前に、たっぷり勉強させておいた。なのに、あの馬鹿は、なぜ刺したかと訊かれて、すべてぶち壊した。あんなやつは殺すしかないって答えたんだ。おぼえてるだろ？」
「おぼえてる。あれで、もう六カ月待たなきゃならなくなったから」
「ヴァージルの右腕の内側には、まっすぐな長い傷痕がある。ガキのころ、チェインソーが跳ね返ってできた傷だ。ムショじゃ、毎日せっせと女に手紙を書いてた。それから、魔術師みたいにピアノを弾いてた」
「今でも弾けるわ」
「どうだ、おれがヴァージルを知らないと思うか？」
「いいえ。でも、わたしはあんたを知らない。ヴァージルは本物のバークならある名前を知ってるっていってた。それを訊いてみろって……この世でいちばん危険な男の名前……答えは一つしかない。バークならその答えを知ってるって」
おれは煙草に火をつけた。マッチの炎を透かして女の顔

を見た。「ウェズリイ」その男の名前をささやいた。とたんに墓場の冷気を感じた。
女はうなずいた。ふうっと長い溜め息をついた。「やっぱりあんただわ、バーク」そういうと、バッグを探って、煙草を取り出した。それに火をつけてやった。「ヴァージルはあんたの兄弟だって……」質問するような口調だった。
「そうだ」おれははっきり答えた。むこうが訊いたのは、交わりの深さのことで、血のつながりのことじゃない。
女は煙草の煙を深々と吸い込むと、両肩をブースの背もたれにどしんとぶつけた。「よかった」

4

背後にママの気配を感じた。おれは左肩を軽く落とした。ママはおれの脇をまわってテーブルに近づくと、おれとヴァージルの女房の間に立った。
「こちらはレベッカだ、ママ。おれの兄弟のかみさんだ」
ママはお辞儀をした。「スープ飲むかい？」
おれはどうするというようにレベッカに首をかしげてみせた。「ええ、いただくわ」レベッカはいった。
ママは何気ない顔をしていたが、目は油断していなかった。「あんた、ずっと何も食べてないね。おなか、すごくすいてるだろ？」
「そのはずだけど……すっかり忘れてたわ」
ウェイターが一人現れた。白い上着をわざとだらしなく着て、肩から吊ったホルスターにすぐ手が届くようにしている。ママが広東語で何かいいつけた。ウェイターは現れたときと同じように、さっと姿を消した。

「何もまずいことはないかい？」ママが訊いた。
「ああ、大丈夫だ、ママ」
ウェイターが湯気の立つ酸辣湯の壺を持ってきた。ママは巧みに玉じゃくしを使って、おれの椀につぎ、それからレベッカの椀についだ。
「まず、食べてからだね」ママはそういうと、レジのほうに戻っていった。
「少しずつ飲むんだ」おれはレベッカにいった。が、遅すぎた。レベッカは鼻から荒い息を吐き出して、スプーンを落とした。
「うわ！　何、これ？」
「ママのスープだ。自分でスープ種をつくって、キッチンにあるものを何でも放り込んでいく。体にいいスープだ」
「薬みたいな味ね」
「そういわずにもう一口。ただし、少しずつするんだ」
「わかったわ」口もとにかすかな笑みが浮かんだ。
やはり腹をすかしていたようだ。ウェイターが麺を盛った皿を持ってきた。おれがそれを片手いっぱいにつかんでスープにばらまくように入れるのを見て、レベッカも同じことをした。レベッカの椀はすぐに空になった。おれが玉じゃくしを持ち上げてみせると、レベッカはうなずいた。おかわりをよそってやった。ママが店の向こうでうんうんとうなずいているのが見えるようだった。レベッカの頬骨のあたりが色づいて斑点のようになっていた――タフな女だ。ママのスープは前菜代わりに飲めるような代物じゃない。
ウェイターが椀を下げた。また灰皿を取り替えていった。レベッカの煙草に火をつけてやってから、自分の煙草に火をつけた。そして「話を聞こうか」と促した。
「ヴァージルが出所した後、わたしたち、町を出たの。シカゴからハモンドへ移って、それからメリルヴィルへ。州境を越えたところよ。もうインディアナ」
「どの辺か見当はつく」
「ヴァージルは仕事を見つけたの。工場の仕事。順調にいってたのよ、バーク。女の子も産まれて。ヴァージニアっていうの。もうすぐ十歳。それと男の子も。父親と同じ、ヴァージルって名前。ヴァージルはいい人よ。それは知ってるでしょ。工場が忙しいときは人の倍働いて、暇なときは短期契約の演奏の仕事をとったわ。シカゴのクラブでピアノを弾くの。家も手に入れたわ。わたしたちの家。賃貸なんかじゃなくて。ケンタッキイにはもう戻らなかったわ。だって、計画どおり、自分たちの生活の基盤ができたんだもの」
自分たちの生活の基盤――自分たちの所有する土地。こ

こじゃ、あり得ないことだ。おれは煙草を深々と一服した。レベッカがリズムにのって、話の本題に入るのを待った。

「わたしにはいとこがいるの。いとこ半っていうのかな、正確には。いとこのミルドレッドの息子だから。名前はロイド。この子が家でいろいろ馬鹿なことをしでかすようになったのよ。お酒は飲む。学校はさぼる。面白半分で車を盗む。まあ、よくある子どもの非行だけど」

おれはうなずいた。

「それで、ミルドレッドに頼まれたの。しばらく、あんたのところでロイドを預かってくれないかって。ロイドには父親がいないから、ヴァージルにしつけてもらえば少しは落ち着くと思ったんじゃないのかな。うちには部屋もあったし。わたし、ヴァージルに頼んでみたの。あの人、何もいわなかった。でも、それはこちらが願ってたとおりよ。おれはいいよってことだから。ヴァージルってそういう人なの」

それで思い出した。刑務所の中庭でのことだった。新入りの若造が黒人のグループに取り囲まれた。おれはナイフを房に置いてきたのを悔やみながら、そちらに近づいていった。そのとき、背後にヴァージルの気配を感じた。振り返るまでもなかった——掩護してくれていたのだ。ヴァージルはそういうやつだ。おれみたいに少年院で育ったわけじゃないが、同じルールで行動した。やるならやる。半端に手は出さない。

レベッカは新しい煙草に吸いさしの火を移した。「ロイドはうちで暮らすようになったの。ハイスクールにもいかせたのよ。あの子、ちゃんとやったわ。ただ、人づきあいは苦手だったみたいだけど。自分の部屋にこもったりして。それで、ヴァージルが〈セヴン-イレヴン〉のパートの仕事を見つけてやったりしたんだけど。あの子、車を買うために貯金もしてたのよ。うちの子たちにもよくしてくれたわ。ヴァージニアなんか、ほんとにあの子を好いてたわ。実の兄みたいに。ただ、ロイドにはガールフレンドが一人もいなくてね。わたしはそれが心配だったんだけど、ヴァージルにこういわれたの。男はそれぞれ自分のペースで成長してくんだ。そんなに騒ぐことはない。だけど、そんなに心配なら、カルミットシティーの売春宿にでも連れてってやろうか。おれは下で待ってるからって。で、わたしはこういったの。あの子を売春宿に連れてくっていうんなら、自分はモーテルの部屋でもとったらって。うちのベッドじゃ寝る気になれないだろうから」また薄い唇に笑みが浮かんだ。「でも、わたしはかえって気が楽になったみたい。まあ、そんなふうで順調にいってたのよ。ところが、問題が起きたの。ほら、よくティーンエイジャーがカーセック

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com